第３編　がんに関する理解の促進

第１章　がんに関する正しい知識の普及啓発の充実・強化

県民ががんに関する正しい知識を持ち、がんを自分にも関係する身近な病気の一つと捉えることは、生活習慣の改善、がん検診の受診、医療機関での受療等において、県民一人ひとりが自ら適切に行動することにつながります。

また、県民がたとえがんにかかっても、尊厳を持ち、安心して暮らせる地域社会を構築するため、県民一人ひとりが、がんに関する正しい知識を持ち、がん患者に対する理解を深めることが重要です。

がん及びがん患者に対する理解の促進は、がん対策の推進の根幹となるものであり、県、市町、医療機関及び多くの関係者が協働し、あらゆる機会を通じて普及啓発の充実・強化に取り組みます。

１　現状と課題

■　がんに対する正しい理解

○　２人に１人が、がんにかかる可能性があり、がんは、全ての県民にとって身近な疾患の一つです。

○　がんの、死、怖さ、痛み、不治といった「負のイメージ」により、がんに関する情報を避けようとする県民も少なくありませんが、生活習慣の改善等により予防できるがんがあること、早期発見により治療成績が向上することなど、がんを正しく理解することが重要です。

○　県民一人ひとりが、がんに関する正しい知識を持ち、がんを自分にも関係する身近な病気の一つと捉えることは、生活習慣の改善、がん検診の受診、医療機関での受療等において、自ら適切に行動することにつながります。

○　このため、県では、市町や医療機関を始めとする多くの関係者と連携し、毎年、「がん征圧月間（９月）」や「やまぐちピンクリボン月間（１０月）」等の集中キャンペーンを展開し、がんの予防や早期発見・早期治療の重要性について、広く県民への普及啓発に努めてきました。

○　このような取組等により、本県のがん検診受診率は徐々に改善しているものの、まだ他県と比べて低い受診率が続いていることから、全ての県民が、がんを自分に関係する疾患として捉えるよう普及啓発を進めていくことが重要です。

■　がん患者に対する理解

○　がん患者・経験者とその家族は、がんの疾患・治療についてだけでなく、就労問題も含め、様々な不安や悩みを抱えています。

○　県民が、たとえがんにかかっても、尊厳を持ち、安心して暮らせる地域社会を構築

するため、県民が、がんに関する正しい知識を持ち、がん患者に対する理解を深める取組が必要です。

２　本計画における取組と目標

■　がんの予防や早期発見に対する理解の促進

○　これまでも、広く、県民への普及啓発に取り組んできましたが、今後、県民一人ひとりがさらに理解を深めるよう、県、市町、医療機関及び多くの関係者が協働し、更なる普及啓発を促進します。

▼　がんとは
- 　がんの発生や進行のしくみ、検診・検査や治療の一般的な方法
- 　２人に１人が、がんにかかる可能性があること　等

▼　がん予防
- 　喫煙等生活習慣が健康に及ぼす影響、がんの原因となりうる感染症
- 　がんのリスクを減少する生活習慣や検査　等

▼　早期発見
- 　がんは早期発見・早期治療で治癒しうる病気であること（早期発見の重要性）
- 　がん検診の種類や方法、受診するための手続き　等

■　がん患者に対する理解の促進

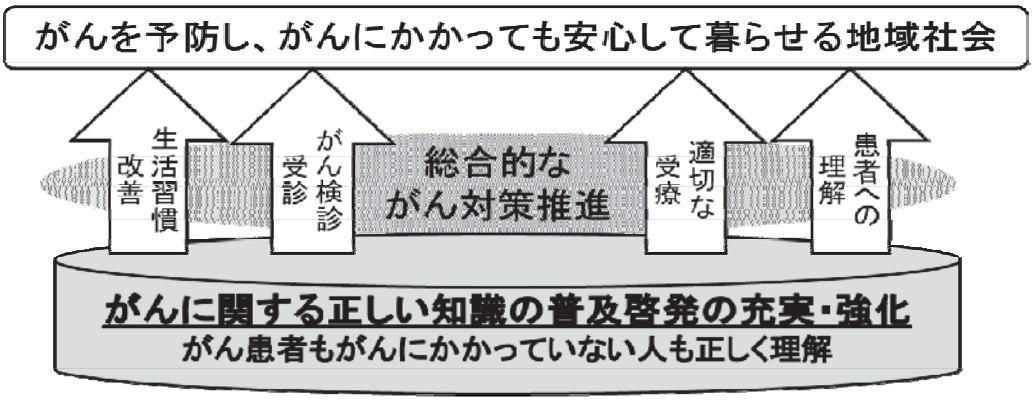
○　２人に１人ががんにかかる可能性のある中、がんの治療をしながら、社会生活を送ることができるよう環境整備を図ることが必要です。

また、働く世代の患者も少なくないことから、就労が継続できるように、企業を含めた周囲のサポートが必要です。

県民誰もが、がん患者に対する理解を深め、「がんは単なる個人の健康の問題ではなく、みんなで考えなければならない社会的な問題である」という認識を共有し、「患者をしっかりとサポートしていく」という機運を高めるよう普及啓発を行います。

■　「がんを予防し、がんにかかっても安心して暮らせる地域社会の構築」を目指して

○　がん及びがん患者に対する理解の促進は、がんの予防、検診及び医療などがんに対する県民の適切な行動、がん患者に対する正しい理解と支援等、がん対策の全ての分野において根幹を成す重要な取組であり、普及啓発を充実強化することによって「がんを予防し、がんにかかっても安心して暮らせる地域社会の構築」を目指します。



コラム　がんを経験したがん患者会の方からのご寄稿

○　１６年前の乳がんの経験、そして、今回の自分の受け止め

自己検診で１㎝の乳がんを見つけ、手術をして、16 年が経過したある日。
両親も前立腺がんと肝内胆管がんで亡くなったので、「還暦には人間ドックを受けて全身をチェックしておこう」と、２年遅れで今年の４月受診しました。
するとびっくり。０期の乳がんが見つかったのです。しこりもありませんし検診でなければ見つからない早期がんです。
前回と同じ乳房でしたので、リンパ郭清も放射線治療も前回行っており今回はナシ。手術も温存で。

16 年前の私を思い出してみると、今回は、自分の受け止め方がずいぶん違いました。
初めて乳がんと言われて治療を始めた時、「休む間、同僚になるべく迷惑をかけないように、入院するまでは仕事をしておこう」と、ぎりぎりまでバタバタ。
そのため、乳がんについて勉強したのは手術が終わってからでした。当然、家族にも詳しく伝えられませんでした。
手術前夜、同室の患者さんが「目が覚めたら手術は終わっているからなにも心配ないよ」と、声をかけてくださった温かさを今も忘れません。
退院後は、東京の「新樹の会」という患者会を教えていただき、参加しながら、がんについてもずいぶん勉強しました。そして、がんと共に生きていく上で自分にできる事と仲間と一緒だからできる事があることを知り、仲間を募って患者会「あいの会」を立ち上げました。「がんになっても前向きに生きていこう」と。

今回の乳がんは、少し自分の生活を変えなさいという身体からの悲鳴かなと思いました。
睡眠時間を削らない。無理して手を拡げずに物事は期限を作りながら一つずつ片付けていく　等々。
現在改善に向けて努力中です。

第２章　がん教育の推進

子どもの頃から健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理することが重要であり、がんに対する正しい知識や、がん患者への理解、命の大切さに対する認識を深めることができるよう、がん教育の取組の充実を目指します。

１　現状と課題

○　がん対策基本法においては、「がんに関する教育の推進」を新たに明示し、県民ががんやがん患者に対する理解を深めることができるように、国や県ががん教育の推進に必要な施策を講じることとされています。

○　子どもの頃から、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理する習慣を身につけるとともに、がんやがん患者への理解、命の大切さに対する認識を深めることが大切です。

【これまでの主な取組】

県では、子どもの健康づくりを推進するため、学校で使用する子ども向けのがんの副読本等の作成・配布や、たばこの害を伝える喫煙防止教育の出前講座等に取り組んできました。

○　学校では、体育科・保健体育科において、がんという病気を、生活習慣病の予防や喫煙による害等について学ぶ健康教育の一環として扱っています。

○　これらに加え、体育科・保健体育科以外の総合的な学習の時間や特別活動等を活用し、さらに知識を深めるがん教育に取り組んでいる公立小・中・高等学校の割合は、それぞれ 9.5%、26.4%、12.9%です（平成 28 年度(2016 年度)）。

子どもの頃からがんという疾病を正しく理解し、正しい生活習慣等を身に付けるためには、学校の教育活動全体を通じて、更なる教育の充実を図ることが求められます。

○　また、がん教育の実施にあたっては、現場でがん医療等に直接携わる医師等が子どもたちに伝えることも重要であり、学校と医師会等関係団体や地域のがん医療を中心的に担うがん拠点病院等との連携が必要です。

２　本計画における取組と目標

○　がん対策所管部局と教育委員会の連携によるがん教育の推進 *（県、市町、教育委員会等）*

がんに関する正しい知識をより効果的に習得できるようにするため、県や市町において、がん対策所管部局と教育委員会が緊密に連携し、がん教育を推進します。

○　学校の教育活動全体を通じたがん教育の実施 *（県、市町、教育委員会等）*

子どもたちががんについての知識をさらに深めることができるよう、体育科・保健

体育科以外の時間を活用したがん教育を推進します。

○　**専門職種との連携によるがん教育の充実**（*県、市町、教育委員会、学校医、がん拠点病院等、医療機関、医師会、患者団体等*）

医師会やがん拠点病院等と連携し、学校医やがん医療に携わる医師、がん経験者等が、外部講師として学校現場で直接がんに関する知識やがん経験者等の声を伝えることにより、がん教育の充実を図ります。

３　個別目標

指　　標	現　　状	目　標　数　値
がん教育を実施する県立高等学校の割合（総合的な学習の時間や特別活動等、保健体育科の授業以外での実施）	１２．９％ （H28 年度(2016 年度)）	増やす （H35 年度(2023 年度)）
学校が行うがん教育に協力するがん拠点病院等の数	３か所 （H28 年度(2016 年度)）	全てのがん拠点病院等 （H35 年度(2023 年度)）

～　子どもたちが、早い段階から、がんについて学ぶことは大変重要です。～

がんについて真剣に考え、患者の様々な思いを汲み取ることとなり、生涯にわたって影響をうける貴重な体験となります。

■ がんの教育絵本を使った授業を受けた小学６年生の感想

（日本対がん協会ホームページ「がん教育レポート」より抜粋　原文のまま掲載）

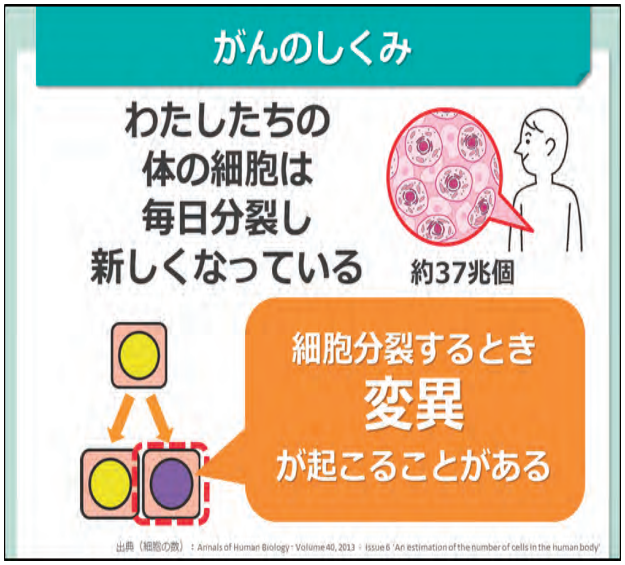
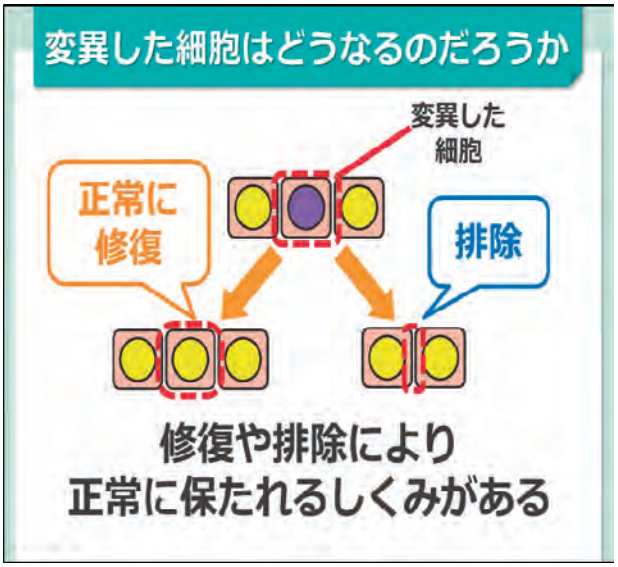
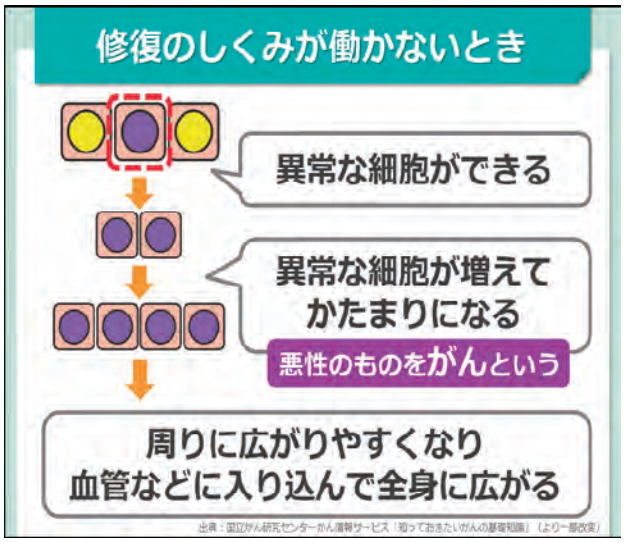
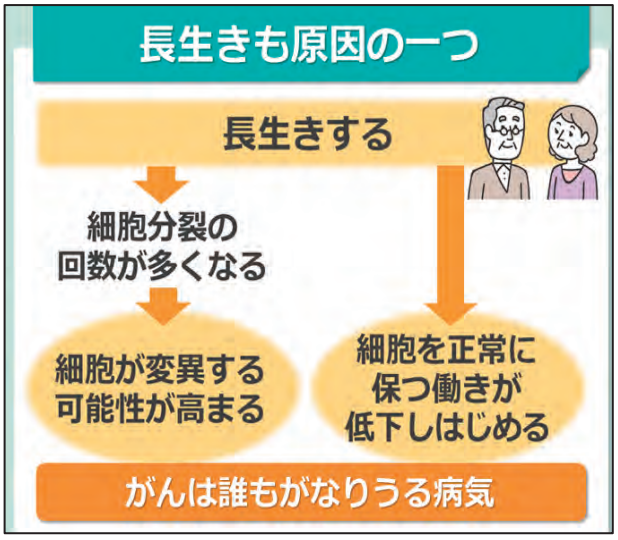
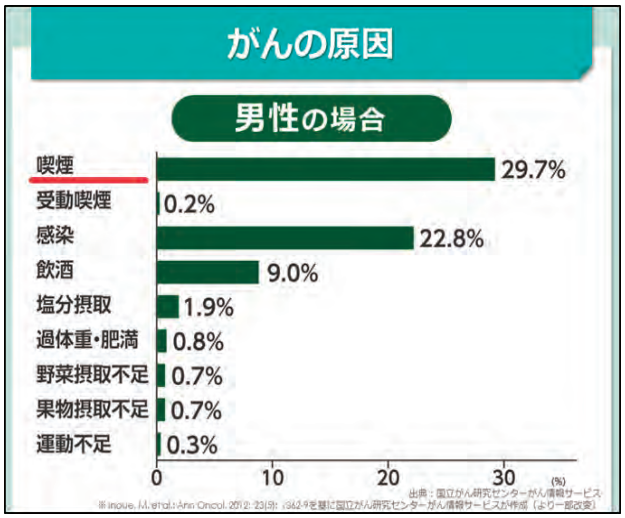
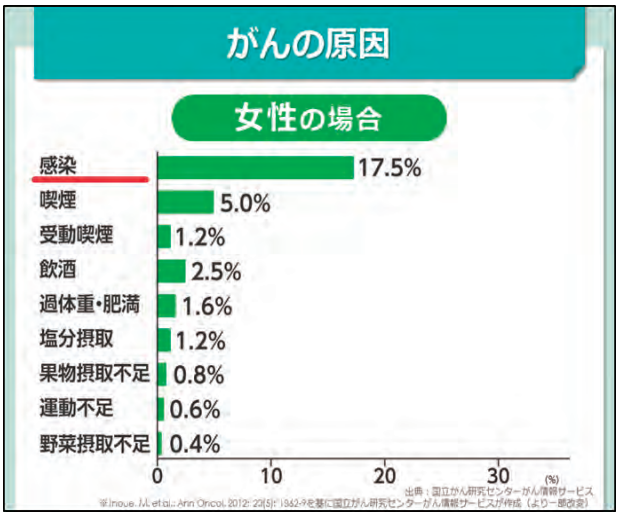
＊　私がこの学習で学んだことは、がんは自分には関係ないわけではないということです。病気の人が差別されているという事に気づきました。

＊　友達がもしかしたら明日がんになってしまって入院すると考えると、ありふれた毎日がとても大事なんだなと改めて感じました。

＊　とても勉強になった。がんはとてもこわくて死ぬ病気だと思っていたけど、意外と治るんだなあと思った。最近の医学はすごい！！

＊　がんを経験している人としてない人では生きることの考え方が違っているのかなと思いました。ゆう君（注：教育絵本の主人公）はがんだとわかっていたのに、悩んでいるはずなのに、そのような姿だと言うことに感動し、体は弱いけど、心は強いのかなと思いました。

○　参考資料１　がん教育プログラム「がんという病気」（スライド全 15 枚）（抜粋）

がん教育推進のための教材 指導参考資料【中学校・高等学校版】より（文部科学省）

（ http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1385781.htm ）